報　告

ストーマ装具を装着した看護学生の生活体験からの気づき

髙橋　甲枝*　　坂本　未穂*　　財津　倫子*　　大嶋　満須美*

＜要　旨＞

本研究の目的は、演習による模擬ストーマとストーマ装具を装着した看護学生の日常生活体験からの気づきを明らかにすることである。看護学生３年生 105 名を対象に装具装着を１日間体験後、提出された課題レポートの記述内容について質的帰納的分析を行った。

装着体験の学びについて、【装具を意識した生活】、【装具･装着の違和感･不快感】、【装具の扱いの困難さ】、【装着による不安】、【周囲の目が気になる】、【患者の気持ちの推測】、【患者･家族への援助の視点】の７つのカテゴリーが抽出された。学生の気づきは、【装具を意識した生活】をコアカテゴリーとしていた。学生は、装具装着による身体的・心理的側面への影響と【周囲の目が気になる】ことで、行動抑制に繋がる経験をしていた。さらに、装着体験から【患者の気持ちを推測】し、【患者・家族への援助の視点】を考えていた。

学生が患者疑似体験からストーマ造設患者の困難を知ることは、患者に共感し、患者理解の深まりとともに必要な看護を考える上で有用な体験であったと考える。

キーワード：看護学生、ストーマ、気づき、患者体験、シミュレーション

Ⅰ．はじめに

ストーマ（人工肛門）造設患者（保有者）は、手術に起因するさまざまな不安や困難を感じながら生活を行うことになり、価値の転換を図り生活の再構築を行う必要がある。また、ストーマを造設することにより自尊心の低下や、自己評価・自分に対する価値観の低下が起こり、ストーマ受容を妨げている[1)]。さらに、他者に対して、羞恥心や嫌悪感、申し訳なさなどを常に抱きながら社会生活を送ることになる[2)]。このようなストーマ保有者の生活を想定し、個別に応じた適切な指導が必要[3)]であり、患者の退院後を見据えた援助を要する。

退院指導は、急性期看護学実習を行った学生が主体となって行う看護行為の一つである[4)]。本学での実習でストーマ造設患者を受け持つ学生は、周術期看護をとおして、ストーマの観察、疼痛緩和やセルフケアに対する看護援助を行う。その過程において学生はストーマの観察や、排泄経路の変更に対する患者の不安については着目することはできていた。しかし、ストーマ造設患者が退院後にどのような生活上の問題や困難を感じるのか、どのような看護支援を必要とするのか、ストーマ保有者の生活をイメージすることができていないことから、退院後の生活を踏まえた援助を考えることに難しさを感じていた。一般的に学生は、人生や日常生活での経験が少なく、自分が経験していない他者の体験を理解することは容易ではない[5)]と言われており、学生が排泄経路の変更を余儀なくされた患者の日常生活を想像し、患者を生活者として捉えて支援することは難しいと考えられた。

荒木は、疑似体験について、実際に体験できない疾患による身体の変化を理解するためには、情動的能力を活用することが有効で、疑似体験であっても実際に知覚を刺激することで思考段階をふむことができる[6)]と述べている。これまでのストーマ装具を装着する疑似体験の効果については、パウチを装着するという現実的な体験をしたことが、学生にとって共感しやすく想像しやすい状況を生み出し[6)]、自分の身を患者の身に置き換えることで感覚的類似を体験でき[7)]、患者の理解を深めるために有効である[6)-10)]と言われている。

＊西南女学院大学保健福祉学部看護学科

そこで、ストーマ造設患者の疑似体験を演習に取り入れ、学生が患者の日常生活を追体験することにより、ストーマ装具を装着して生活する造設患者の理解を深め、患者疑似体験から得られる気づきと患者体験の教育効果を明らかにしたいと考えた。

Ⅱ．目的

本研究の目的は、模擬ストーマとストーマ装具を装着した看護学生の日常生活体験からの気づきを明らかにすることである。

Ⅲ．演習概要と方法

1．演習概要

演習は、3年生前期、「リハビリテーション看護学」1単位30時間のなかの一単元を使用して行っている(2020年より「成人看護学演習」内にて実施している)。

1）学生のレディネスと演習の学習目的・内容

学生は、2年生後期に「成人急性期看護学方法論」で、ストーマ造設患者の看護について学修している。本演習では、既習のストーマ造設患者の看護について想起させ、講義と実践に向けた演習を行った。

学習目的は、「ストーマ造設患者の看護を理解する」とし、学習目標は、①ストーマ造設患者の観察のポイントを述べることができる。②ストーマ造設患者の看護ケアのポイントを述べることができる。③ストーマ装具装着体験を通して患者への看護支援を考えることができるとした。

演習内容の流れを図1に示す。演習にはワークシートを用いた。ワークシートには、①演習前の患者のイメージ、②模擬ストーマの形状の観察・計測、③臍部からのストーマの位置の計測とアセスメント、④ストーマ装具を装着して日常生活をとおして感じたこと、⑤ストーマ装具を剥がしての観察、⑥造設患者に対する看護師の役割についてとし、ワークシートの④～⑥は演習後の課題とした。

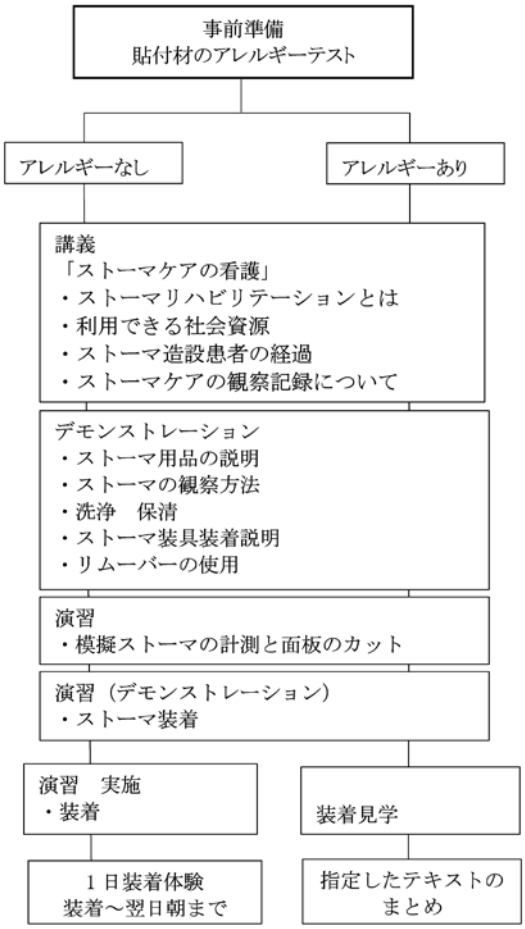


図1．ストーマ演習の流れ

2）事前準備

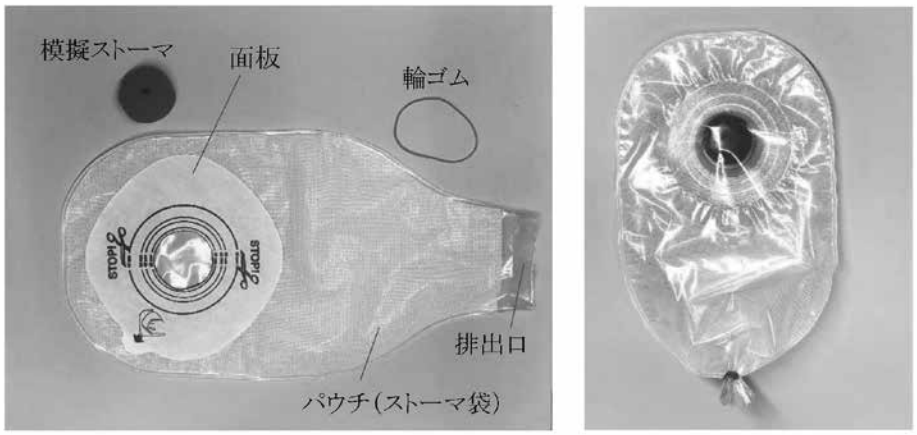
事前準備として貼付材のアレルギーテストを行い(模擬ストーマの貼付材〔ポリウレタンフィルム〕、パウチの貼付材〔面板〕のパッチテストを48時間行った)、皮膚に異常のないことが確認できた学生は、模擬ストーマとストーマ装具の装着を行った。

2．教材と課題

今回は、ワークシート④ストーマ装具を装着して日常生活をとおして感じたことを分析対象とする。

先行研究[9]をもとに模擬ストーマを紙粘土で作成した（図2）。学生はクリーブランドクリニックの原則に従いストーマの位置決めを行い、その位置に模擬ストーマを皮膚に固定した。各自模擬ストーマの計測を行い、面板のカット、装具の装着体験を行った。今回はワンピース型の装具を用いた。

学生には、模擬ストーマと装具を装着したまま1日生活することを課し、「ストーマ装具を装着して



①演習用の物品　　②模擬ストーマにストーマ装具を装着した様子

装具:convatec　アクティブライフ®ドレインパウチ ST-2

図2．模擬ストーマと ストーマ装具

日常生活（歩行、運動、座位、入浴、更衣など）をとおして感じたこと」を課題とした（ワークシートの④)。課題の補足説明として、ストーマ装具を装着して歩行時・座位時・睡眠時にストーマ装具をつけた感じはどうか、ストーマ装具を装着して入浴してみること、ストーマパウチのゴムを外して、排泄物の破棄を経験してみることを課題資料に記載した。

Ⅳ．研究方法

1．研究デザイン

質的帰納的研究

2．研究対象

2019 年 7 月、A 大学看護学科にて「リハビリテーション看護学」を履修した 3 年生女子学生 109 名のうち、アレルギーテスト陽性者で装着体験未経験者 2 名を除き、研究参加に対して文書による同意の得られた 105 名の課題を分析対象とした。

3．データ収集方法

データ収集期間は2020年3月とした。収集方法は、すでに演習終了後に提出された課題について、研究協力への同意を得られた学生の学籍番号と名前を削除してデータとして使用した。

4．分析方法

課題から装着体験をとおして学生が記述した「ストーマ装具を装着して日常生活をとおして感じたこと」を複数の研究者間で熟読し、文章から、体験に基づく内容を含んだ文を 1 文脈単位としてデータ化し、データに記述されている内容の類似性に基づいて分類し、コード化した。さらに、サブカテゴリー、カテゴリーと抽象度を上げて意味づけを行った。データ分析の厳密性と解釈の妥当性を確保するために、研究者間にて検討を加えた。

5．倫理的配慮

研究参加依頼は、研究目的と方法、意義、研究参加は自由意志であること、授業評価に影響しないこと、個人が特定されないように氏名欄はカットし破棄することなどを口頭および文書にて説明し、同意書にてサインを得た。説明および同意は、成績評価終了後とした。本研究を実施するにあたり、西南女学院大学倫理委員会の承認（2019 年度第 9 号）を得て実施した。

Ⅴ．結果

学生の模擬ストーマおよび装具を装着した生活体験における学生の気づきは、表 1 のとおりである。抽出されたコードは 126 であった。また、【装具を意識した生活】、【装具・装着の違和感・不快感】、【装具の取り扱いの困難さ】、【装着による不安】、【周囲の目が気になる】、【患者の気持ちの推測】、【患者・家族への援助の視点】の 7 つのカテゴリーが抽出された。

以下、カテゴリー【　】、サブカテゴリー〔　〕、コードは［　］、記述内容は「　」で示し、カテゴリー毎に結果を述べる。

表１．学生の模擬ストーマ・ストーマ装具装着の気づき

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
装具を意識した生活	装具を気づかう	更衣時に装具が外れないように気づかう	着脱時に装具を気づかう
		座位時に装具を気づかう	入浴時に装具が外れないように気づかう
		寝返り時に装具を気づかう	
	漏れや臭いを確認	行動するたびに漏れや臭いを確認	
	ストレスに感じる	1日中ストーマのことが頭から離れない	リラックスできない
		ストーマを意識することがストレス	邪魔にならない工夫は苦痛
	服装を選ぶ必要性	着たい服を着ることができない	目立たないような服装
		服装は緩めなものを選択する	
	装具・装着の慣れ	気にならない	付けていることを忘れる
		付けていることの慣れ	装具ははずれないという安心感
装具・装着の違和感・不快感	日常生活での装具・装着の違和感・不快感	活動時の違和感・不快感	装着の違和感・不快感
		入浴時の違和感・不快感	装具の違和感・不快感
		更衣時の違和感・不快感	服・装具のかさばる違和感
		座位時の違和感・不快感	装着しながらの入浴に抵抗
		睡眠時の体位による違和感・不快感	無意識に触ったり、外したくなる違和感
		装具がすれる・あたる違和感・不快感	
	装具による音	活動時の擦れる音が気になった	排泄物を便器に流すときの音
	装具による皮膚への影響	皮膚の発赤	装具による痛み
		装具による掻痒感	皮膚が引っ張られる感覚・痛み
	臭いが気になる	保護材の臭い	一日つけていると臭いが気になる
	邪魔な存在	活動時に邪魔	装具が邪魔
		更衣時に装具が邪魔	邪魔で座りづらい
		入浴時に邪魔	邪魔な存在
		睡眠時に邪魔	気になる存在
	排泄物への不快感	汚物をみるのは苦痛	排泄行為が不快
		排泄物の存在が不快	
	見た目の戸惑い	更衣への意欲の減少	ストーマを装着していることで悲しくなった
		ストーマを装着した見た目が気になった	自尊心の低下
装具の取り扱いの困難さ	装具の取り扱いの難しさ	更衣に時間がかかる	入浴時の取り扱いが難しい
		ストーマ交換など面倒くさい	入浴後の装具の取り扱いの難しさ
		ストーマの固定の難しさ	パウチの取り扱いの難しさ
		装具のゴム固定の難しさ	更衣時の装具の取り扱いの難しさ
		装具の取り扱いの難しさ	
	排泄物の廃棄の難しさ	排泄物の廃棄の難しさ	廃棄に時間がかかる
装着による不安	見えていないか不安	見えていないか不安	
	装具が取れないか不安	動作時に装具が取れないか不安	睡眠時に装具が取れないか不安
		更衣時に装具が取れないか不安	入浴時に装具が取れないか不安
		座位時に装具が取れないか不安	入浴時にお湯が入らないか不安
	漏れ・臭いへの不安	動作時に漏れないか不安	装具の剥がれ・漏れ・臭いへの不安
		睡眠時に漏れないか不安	入浴時に装具が濡れないか不安
	取扱いが分からない不安	取扱いが分からない	
	排泄物の廃棄への不安	排泄物の廃棄の失敗への不安	排泄物の廃棄方法への不安
	皮膚トラブルへの不安	皮膚トラブルの不安	
周囲の目が気になる	音がするのが恥ずかしい	体動時に音がするのが恥ずかしい	音が気になり周囲の目が気になる
	見える・見られるのが恥ずかしい	更衣の際に見えていないか気になる	見えるのが恥ずかしい
		周りの人に見えていないか気になる	見られるのが恥ずかしい
		周りの視線が気になる	見られるのが嫌だ
	服のふくらみが恥ずかしい	服のふくらみが恥ずかしい	
	周囲の目が気になる	他人にどう思われるか気になる	更衣の際に周囲の目が気になる
	周囲への臭いが気になる	周囲に臭いがもれていないか気になる	
	周囲の視線を避けるような行動	隠しながら歩く行動	人が多い場所への移動に気が進まない
		すれ違う人が気になる行動	人の目が気になり活動が制限される
		人と会うときに服を気にする行動	

表１．学生の模擬ストーマ・ストーマ装具装着の気づき（つづき）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
患者の気持ちの推測	身体的影響の推測	食欲への影響の推測 睡眠への影響の推測	皮膚への影響の推測
	精神的影響の推測	患者の自尊感情低下の推測 患者の否定的感情の推測	精神的に苦痛・ストレスの推測 ボディイメージ確立の難しさの推測
	装具の取り扱いの難しさ・大変さの推測	排泄物廃棄の難しさの推測 排泄物の処理をこまめに行うのは大変だと思う	慣れるまで大変だと思う
	排泄物による不安・不快感の推測	排泄物の臭いへの不安の推測 排泄物への不快感の推測 排泄物による不快感の推測	排泄物の漏れへの不安の推測 漏れや臭いを気にした生活の推測
	装着による日常生活への影響の推測	十分なリラクゼーションはできないだろうと思う 生活しづらいだろうと思う 蒸れて不快だろうと思う	自分の好きな服が着られないだろうと思う 服装を選ぶ必要性の推測
患者・家族への援助の視点	看護者のケア方法の習得の必要性	ケア方法や日常生活を習得する必要性	日常生活に影響することを学習して看護にあたる必要性
	ストーマ造設位置の重要性	ストーマの位置は日常生活を送るうえで重要	
	ストーマ装具の選択の必要性	患者が扱いやすい装具を選択する必要性	
	患者の負担や苦痛、日々のストレスを軽減する必要性	ストーマ装着の患者の気持ちを考えて支援する必要性 患者の苦痛を軽減する必要性	日々のストレスを軽減する必要性
	装着・廃棄方法・日常生活の注意点を指導する必要性	臭気を減らすための指導の必要性 日常生活の注意点を指導する必要性	装着・廃棄の注意点を指導する必要性
	環境・設備・支援の充実の必要性	オストメイトトイレの必要性	周囲の人の支え・協力の必要性

１．【装具を意識した生活】

【装具を意識した生活】は、17 のコードが抽出され、〔装具を気づかう〕、〔漏れや臭いを確認〕、〔ストレスに感じる〕、〔服装を選ぶ必要性〕、〔装具・装着の慣れ〕の５つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、「**行動するたびにストーマ装具を確認し、漏れや臭いが生じていないかを確認していた**」と生活体験の中で〔装具を気づかう〕という体験をしていた。これらの行動は、〔ストレスに感じる〕として捉えられていた。さらに、「**ベルトを締めることができない**」、「**服の上からでも形が分かるので、服を選ばないといけない**」と〔服装の選択の必要性〕を記述していた。一方、[付けていることの慣れ]、[付けていることを忘れる]、[装具ははずれないという安心感〕と記述しており、〔装具・装着の慣れ〕を感じていた。

２．【装具・装着の違和感・不快感】

【装具･装着の違和感･不快感】は、抽出されたコードは 34 と最も多く、〔日常生活での装具・装着の違和感・不快感〕、〔装具による音〕、〔装具による皮膚への影響〕、〔臭いが気になる〕、〔邪魔な存在〕、〔排泄物への不快感〕、〔見た目の戸惑い〕の７つのサブカテゴリーから構成された。

〔日常生活での装具・装着の違和感・不快感〕では、「**歩行時、排泄物の出口が大腿部にあたることで、不快に思ったり、違和感を非常に感じた**」、「**歩いてみると左右に皮膚が動く気がして気持ち悪かった**」と［更衣］、［座位］や［睡眠時］などの動作時における不快感や、「**歩行・移動、立位や座位等の体位変換を行う時にがさがさと音がして不快感が増強した**」と、装具の［擦れる音］や〔臭い〕に敏感になっていた。また、「**チクチクと当たってかゆいと感じて不快だった**」と［発赤］、［掻痒感］など〔装具による皮膚への影響〕を体験しており、装具に対して、「**とにかく邪魔で仕方なかった**」と装具の存在自体を〔邪魔な存在〕と感じていた。

また、〔排泄物への不快感〕は、「**排泄物を廃棄しようとすると、手が確実に不潔になりそうで、正直触りたくない**」と、排泄物・排泄行為自体に対する不快感を表していた。さらに、「**脱衣所やお風呂場の鏡で自分の体を見た時、ストーマを装着していることで悲しくなった**」、「**更衣への意欲が減少した**」と装着している自分の体に対して〔見た目の戸惑い〕を表現していた。

３．【装具の取り扱いの困難さ】

【装具の取り扱いの困難さ】は、11 のコードが抽出され、〔装具の取り扱いの難しさ〕、〔排泄物の廃棄の難しさ〕の２つのサブカテゴリーから構成され

ていた。

学生は、「**入浴時は、ストーマのテープ部分にしわがあったため水が入ってしまい、取れそうになった**」、「**排泄物を廃棄する際に、服に付きそうで慣れるまで時間がかかると思った**」、「**トイレ内で膝を床につけることに気が引けたため、立位での排泄処理を行ったが腰への負担がありとても難しく感じた**」と装具の取り扱いや排泄物の廃棄の難しさを感じとっていた。

4.【装着による不安】

【装着による不安】は、15 のコードが抽出された。〔見えていないか不安〕、〔装具が取れないか不安〕、〔漏れ・臭いへの不安〕、〔取り扱いが分からない不安〕、〔排泄物の廃棄への不安〕、〔皮膚トラブルへの不安〕の 6 つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、様々な不安を感じていた。「**運動するとき、服がめくれて装具が見えないか、不安だった**」、「**引っ張ってしまってはがれないか不安だった**」と［動作時］、［更衣時］、［睡眠時］に〔装具が取れないか不安〕だと感じ、装具装着により、［発赤］［掻痒感］がおこりそうという〔皮膚トラブルへの不安〕を感じていた。排泄では「**手につかないか、どういう体勢で廃棄したらよいか、便器につきそうなど様々な不安が生じた**」と〔排泄物の廃棄への不安〕を表現していた。

また学生は、ストーマ装具に対して、「**ストーマ装着部を強く洗って良いものなのか分からなかった**」、「**ストーマの洗い方が分からない**」と〔取り扱いが分からない不安〕が記述されていた。

5.【周囲の目が気になる】

【周囲の目が気になる】は、17 のコードが抽出され、〔音がするのが恥ずかしい〕、〔見える・見られるのが恥ずかしい〕、〔服のふくらみが恥ずかしい〕、〔周囲の目が気になる〕、〔周囲への臭いが気になる〕、〔周囲の視線を避けるような行動〕の 6 つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、「**カサカサ音がして、バレるのではないかとヒヤヒヤした**」、「**ストーマ装具をつけていることで他人に見られたら恥ずかしい**」と〔音〕、〔服のふくらみ〕などに対して恥ずかしさを感じていた。また、「**他者からの視線が気になり、活動範囲が狭まった**」と記述しており、［人の目が気になり活動が制限される］、［隠しながら歩く］など〔周囲の視線を避けるような行動〕を体験していた。

6.【患者の気持ちの推測】

【患者の気持ちの推測】は、20 のコードが抽出され、〔身体的影響の推測〕、〔精神的影響の推測〕、〔装具の取り扱いの難しさ・大変さの推測〕、〔排泄物による不安・不快感の推測〕、〔装着による日常生活への影響の推測〕の 5 つのサブカテゴリーから構成された。

〔身体的影響の推測〕では、［食欲］の減退、［睡眠］や［皮膚］への影響を推測していた。また、〔精神的影響の推測〕では、「**入浴中は全身を見るので、自分の中でボディイメージが確立するまでは時間がかかり、難しい**」、「**入浴中は、服を着ていた時には目に見えなかったストーマが実際に自分の目に映るようになり、ストーマに対して受容した者ではないと、背けたくなるのではないのかと感じた**」、「**もし排泄物がでていたら、においが気になり自分に自信がなくなると思う**」と［自尊感情低下］や［否定的感情］を推測していた。

また、「**造設することで、自分の意志に関係なく排泄が行われるため袋がいっぱいになる前に、排泄物の処理をこまめに行う必要があるため時間の確保が必要になると思った**」と患者の排便コントロール機能を失ったことを意識しており、〔装具の取り扱いの難しさ・大変さの推測〕し、排泄物がパウチに入った場合を想像して、〔排泄物による不安・不快感の推測〕や〔装着による日常生活への影響の推測〕をしていた。

7.【患者・家族への援助の視点】

【患者・家族への援助の視点】は、12 のコードが抽出され、〔看護者のケア方法の習得の必要性〕、〔ストーマ造設位置の重要性〕、〔ストーマ装具の選択の必要性〕、〔患者の負担や苦痛、日々のストレスを軽減する必要性〕、〔装着・廃棄方法・日常生活の注意点を指導する必要性〕、〔環境・設備・支援の充実の必要性〕の 6 つのサブカテゴリーから構成された。

学生は、「**ストーマに異常が起きないよう、ケアの方法や日常生活の適応を習得しなければならない**」、「**座位時にはストーマ装着部分が特に圧迫されるため、ズボンのベルト部分などは避けて装着することが大切だと思った**」と〔看護者のケア方法の習得の必要性〕や〔ストーマ造設位置の重要性〕に気づいていた。また、「**患者さんが扱いやすい形態のストーマ装具を選択するようにすることが大切だと感じた**」、「**この体験を活かし、ストーマ装着患者に対して心から寄り添える看護を行い、患者の負担や**

苦痛、日々のストレスを軽減していきたい」と〔ストーマ装具の選択の必要性〕や〔患者の負担や苦痛、日々のストレスを軽減する必要性〕といったセルフケアに重要なストーマの位置や看護者としての視点を学んでいた。

〔装着・廃棄方法・日常生活の注意点を指導する必要性〕では、「**ストーマ装具の内容物の破棄方法を患者さんに分かりやすく指導することで、ストーマ装具装着後の生活での不便さや苦痛が減少すると感じた**」、「**入浴時はどうするのかなど日常生活において注意する点を指導しておく重要さに気づいた**」と、生活のなかで起こり得ることを予測して［臭気を減らすための指導］や［日常生活の注意点］などを指導する必要性を学んでいた。さらに、〔環境・設備・支援の充実の必要性〕では、患者の立場になり、［オストメイトトイレの必要性］や［周囲の人の支え・協力の必要性］に気づいていた。

Ⅵ. 考察

1. ストーマ造設疑似体験をとおしての気づき

学生は、ストーマ造設疑似体験をとおして、装具装着による重みや装具による蒸れるという皮膚刺激から感じた気づきだけではなく、動作にともなう装具の音、感触、臭い、など五感をとおして【装具・装着の違和感・不快感】を感じており、抽出されたコード数も多くみられた。このことは先行研究と同様の傾向であり[6)8)]、荒木はこのような感覚は学ぶという思考段階ではない[6)]と述べている。しかし、初学者として、視覚や知覚等から感じ取った経験は具体的で、患者を理解するうえで大事な気づきだと言える。また、【装具を意識した生活】を実感し、様々な不安を感じていた。ストーマ保有者は便漏れを気にして外出そのものを不安に感じたり[11)]、静かな所で周りにガスの音が聞こえるのが不安[12)]だと語っている。学生は、便が入っていないにも関わらず患者の便漏れ・臭い漏れを気にしたり、皮膚障害を考えたりと【装着による不安】を感じ、ストーマ保有者が日頃感じている不安な気持ちを考えようとしていた。

保有者の皮膚障害の有無はQOLを低下させる[13)]が、ストーマ装具の皮膚障害やパウチ漏れなどのトラブルが起きないようにすることで、肯定的な思いは保たれる[12)]という報告があるように、皮膚トラブルを起こさないようにセルフケアを指導していくことは重要なことである。学生は、ストーマ袋のずれた時の摩擦や装具・ゴム止めの圧迫の影響について、自ら、皮膚障害への影響を体験し、患者の不随意に排泄される患者のことを考えて、〔看護者のケア方法の習得の必要性〕や【装着・廃棄方法・日常生活の注意点を指導する必要性】について考えており、重要な気づきであった。

また、ストーマ保有者は、動作や固定を工夫しながら日常生活を送っており[14)]、学生も、〔邪魔にならない工夫〕や〔装具を気づかう〕ことをしながら【装具を意識した生活】を送っていた。保有者はこれまでの衣服の習慣の保持やおしゃれを楽しむことが阻害されたり[15)]、衣服の選択に困難を感じている[11)]。田中は、ストーマ保有者の衣服の習慣の保持やおしゃれを楽しむことが阻害されていることについて、医療者が気づきにくい内容である[15)]と述べている。また、鈴木は、入院中は体を締め付けない寝衣での生活が中心であるため、患者自身も退院後の服装選択についてのイメージがつきにくい[11)]と報告している。学生は患者疑似体験を行ったことで、［着たい服を着ることができない］と感じ、演習着から私服へ着替える際に「ベルトを締めることができない」という気づきから締め付ける服よりもゆったりした服の方が良いと〔服を選ぶ必要性〕について考えていた。学生は装具装着によって生じる生活の変化を疑似体験しており、荒木のいう「応答的反応」のレベル[6)]であると考えられ、知覚した現象に対して、思考を伴った気づきをしていた。

そして、学生は他者の視線を感じ【周囲の目が気になる】ことで、行動することを否定的に捉えていた。先行研究でも同様に否定的な感情を報告している[6)-8)]。さらに、学生は自分の体に対して〔見た目の戸惑い〕を感じており、「自尊心」という記述をしていた。しかし、あくまで自分の外観からの感覚で保有者の捉える自尊心の低下とは異なるものである。学生は外見やおしゃれに興味のある年代であることから自分の体への装着に否定的な感情を持ち、服装についても周囲の目を敏感に感じていたのではないかと考えられる。一方、〔装具・装着の慣れ〕という肯定的な受け止め方をしていた。今回は、1日と限定した体験であり、保有者のように排泄孔から随時排泄するという体験をすることは難しいために肯定的に捉えたとも考えられる。また、保有者のにおいの不安の最大の特徴は、においのもとであ

る排便や排ガスが不随意に出ることであるが、これを疑似体験で再現することはできないため疑似体験の限界と考える。しかし、「付けていることの慣れ」や「付けていることを忘れる」という感覚は、「装具ははずれないという安心感」として感じていたのではないかと考えられた。否定的な面ばかりではなく、はずれないという安心を感じたことは患者の不安を軽減する体験であったと考える。

学生は、【患者の気持ちの推測】をしていた。この気づきは、患者の立場で考えることから始まっている。メイヤロフは、自分以外の人格をケアするには、その人とその人の世界をまるで自分がその人になったように理解できなければならないと述べている[16]。学生は自己の体験の感情から「患者の立場」を考えており、このことは、自己と他者が区別されていることが前提で行える心理的所作であり、共感の始まる一つの過程[17]だといえる。今回の体験は患者を理解し共感する機会であり、患者の立場で必要な看護を考える上で大切な視点であったと考える。

2．学生の気づきの概要

学生の気づきの概要を図３に示す。患者疑似体験からの気づきは【装具を意識した生活】をコアカテゴリーとして、【装具・装着の違和感・不快感】、【装着による不安】、【周囲の目が気になる】からなる身体的・心理的側面の影響についての体験である。そして、【装具・装着の違和感・不快感】、【装着による不安】は、自己を中心とした体験である。それに対して、【周囲の目が気になる】は他者との関係から生まれた感情である。これらのカテゴリーは、不安や装具を意識した生活を強いられることで、ストーマ装具を装着した姿に対する羞恥心や周囲の目を意識した生活を送るという経験である。古川らは、ストーマに起因して、他者と関わる気力の喪失や外出意欲の低下につながることを指摘している[3]。学生も、［人の目が気になり活動が制限される］という体験をしており、このカテゴリーの重なりは行動抑制に繋がっていたのではないかと考える。

さらにその体験は、【患者の気持ちの推測】として表現されていた。推測は、実体験からの身体的・心理的な理解と、ストーマについての既習の知識から思考した結果であったと考えられた。推測したことに対して、【患者･家族への援助の視点】である〔ストーマ造設者の負担軽減の必要性〕や〔指導の必要性〕を考えており、同時に、学生は患者および家族への援助だけではなく、〔環境・設備の充実〕が必要であるという気づきをしていた。荒木は、現象や刺激に対して何らかの意味を見出し、結果として意図的な思考および行動を行うようになる反応を「発展的反応」[6]であると述べている。学生は、自分の日常生活の影響だけではなく、他者との関係や社会的な視点まで思考を巡らしていたと考えられる。

ストーマ造設疑似体験により得られた学生の気づきをカテゴリー化することにより生活者としての患者理解の具体化が図れた。また体験から起こりうることを推測し、看護の視点にも気づくことができており、学びの広がりを持つことができたと考える。

今回、ストーマ造設の疑似体験を行ったが、実際

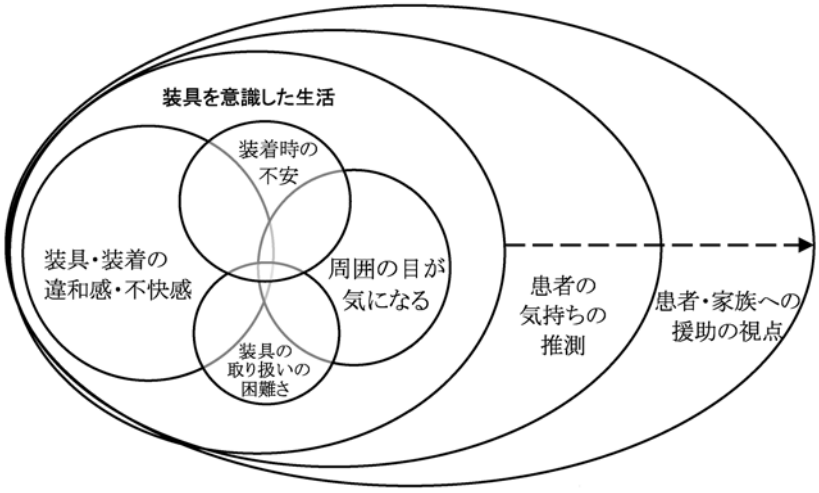


図３．模擬ストーマ、装具装着体験をとおした看護学生 の 気づきの概要

の保有者の生活上抱えている問題や悩みである「ストーマの管理が出来なくなった場合の不安」、「高齢化で寝たきりや半身不随になること」や「便もれ」、「臭いもれ」と「皮膚のただれ、かゆみなどの障害」[18] について、学生の感じた不安や困難さは、内容的にも重みも不十分で患者の全ての苦悩を疑似体験で理解するには限界がある。しかし、藤岡らは、体験学習をすることによって、「知る、わかる」レベルから「実感できる、実際に感じて理解できる」レベルに到達できると述べており[19]、実際に体験できないストーマ造設を疑似体験することは、講義にて知識を得るだけではなく、情動的能力を活用することで知覚を刺激し思考段階をふむことができる[6]。共感性を高める[20] ためには、看護基礎教育の学習のステップとしては有効な方法であったと考える。

Ⅶ. 結論

本研究では、ストーマ装具の装着体験を通しての気づきは７カテゴリーが抽出された。学生は五感を使いストーマ造設による生活の困難さや周囲の目を気にする患者の気持ちの追体験を行うことで、日常生活への影響を感じていた。ストーマ保有者の疑似体験による気づきは、【装具を意識した生活】をコアカテゴリーとした装具装着による身体的・心理的な影響への気づきから、患者の気持ちを推測し、患者・家族への援助の必要性へと思考を巡らせていた。学生が患者疑似体験からストーマ造設患者の困難を知ることは、患者に共感し、患者理解の深まりとともに必要な看護を考える上で有用な体験であったと考える。

今後の課題としては、今回の患者疑似体験での学びが臨地実習でどのように活かされ、看護の視野を広げることができるのかを検討していくこと、また、本演習の効果と課題を整理していくことが必要であると考える。

引用文献

1）森田美佳，吉岡和彦，畑嘉高，中野雅貴，岩本慈能，米倉康博，中根恭司：アンケート調査によるストーマ造設患者におけるストーマ受容の解析．日本大腸肛門病会誌．59：322-327, 2006

2）武亜希子，堤由美子：大腸癌患者の永久ストーマ保有に伴う体験における意味獲得プロセス．日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌．24 (3)：289-299, 2020

3）古川智恵，森京子：高齢ストーマ保有者の経験する困難．ホスピスと在宅ケア．27 (3)：279-285, 2019

4）山本美緒，池田敬子，宮田彩，上田伊津代，山口昌子，辻あさみ，鈴木幸子，宮嶋正子：急性期看護実習における学生が主体となって行った看護行為の実態と課題．和歌山県立医科大学保健看護学部紀要．13：33-39, 2017

5）内海香子，中村美鈴：血糖調節機能障害をもつ成人の体験型学習による演習プログラムでの学生の学びと教育方法の検討 . 自治医科大学ジャーナル . 8 : 105-117, 2010

6）荒木玲子：患者理解のための疑似体験の学習効果とその限界－人工肛門造設患者の疑似体験レポートから－．足利短期大学研究紀要．25 : 13-17, 2005

7）若崎淳子，谷口敏代：学内演習における疑似体験学習の効果と検討－ストーマ造設者のケアに関する演習後の学生レポートの分析から－ . 日本医学看護学教育学会誌 . 14: 8-18, 2005

8）有澤舞，立石和子，太田美帆，西久保秀子，村上希：装着型ストーマモデルを用いた体験的演習による学生の学び　～成人看護学演習レポートの分析～．東京家政大学研究紀要 . 57 (2) : 35-41, 2017

9）杉崎一美，小河育恵，大久保仁司，奥田淳，瀬川睦子：自作模擬ストーマモデルを導入したストーマケア演習における看護学生の学び - ストーマに関するイメージに着目して -. 奈医看護紀要 . 4 : 9-16, 2008

10）田中恵子 , 野村志保子，森本紀巳子：体験学習をした看護学生の患者に対する共感的言動－ストーマ装具を貼用してのオストメイトの疑似体験を通して－．日本看護学教育学会誌．21 (3) : 25-35, 2012

11）鈴木里奈，菊池寛子：ストーマ造設患者が退院後に抱える日常生活上の困難と支援の課題 . 第 50 回日本看護学会論文集　急性期看護 . 63-66, 2020

12）杉田優花，渡辺明美，森野緑，堀田朱里，谷田明美，柳谷明日香，越田貴美子：消化管ストーマの受容とセルフケアが確立するまでの精神的支援の検討－入院中の永久的・一時的ストーマ造設患者へのインタビューを通した比較－ . 49 回日本看護学会論文集　急性期看護 . 87-90, 2019

13）茂野敬，梅村俊彰，井伊みず穂，安田智美，道券夕紀子: ストーマ保有者のストーマセルフケア状況と不安、QOL との関連 . 日本ストーマ・排泄会誌 . 33 (3) : 71-80, 2017

14）宮澤芽生，磯見智恵，藤江真世，佐々木茉衣，酒井彰久: 手術を受けた女性大腸がんサバイバーの就労に関連した

体験 . 第 50 回日本看護学会論文集　慢性期看護 . 98-101, 2020

15) 田中寿江，新田紀枝，佐竹陽子，前田由紀，髙島遊子，奥村歳子，石澤美保子，谷口千夏，石井京子，藤原千惠子: 地域で生活しているストーマ保有者が体験する困難と否定的感情．大阪大学看護学雑誌．22 (1) : 23-31, 2016

16) Mayeroff, M：On Caring. NY, Harper Row Publisher. 1971，田村真、向野宣之訳：ケアの本質．pp.92-94，ゆるみ出版．東京 , 2006

17) 茂木英美子：看護学生の共感性を高めるための教育介入研究の文献レビュー．足利大学看護学研究紀要．7 (1)：13-21, 2019

18) 社団法人オストミー協会：人工肛門・膀胱造設者の生活と福祉．p26, 2011
https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/cyousajigyou/dl/seikabutsu5-3.pdf
（閲覧日 2022/12/21）

19) 藤岡完治，野村明美：わかる授業をつくる看護教育技法 3 シミュレーション・体験学習．pp.133-144, 医学書院．東京 , 2000

20) Annette T. Maruca, Desiree A. Díaz, Joan E. Kuhnly, and Pamela R. Jeffries: Enhancing empathy in undergraduate nursing students; Enhancing empathy in undergraduate nursing students: an experiential ostomate simulation.36 (6) 367-371

Nursing Students' Ostomy Awareness through Simulated Experience of Life with ostomy

Katsue Takahashi *, Miho Sakamoto *, Rinko Zaitu *, Masumi Oshima *,

＜Abstract＞

This study aimed to clarify nursing students' awareness post simulation training in which nursing students spent a whole day wearing a simulated stoma and an ostomy pouch.

Journals of ostomy experience were collected from 105 nursing students in junior year following a day spent with a simulated stoma and an ostomy pouch. The data was then assessed using inductive content analysis.

As a result, seven categories were identified from the factors that students learnt from the simulated experience: (a) ostomy conscious living, (b) strangeness or discomfort with the pouch attachment, (c) difficulty in ostomy care, (d) anxiety with the pouch attachment, (e) self-conscious of own appearance, (f) imagining patient feelings, and (g) nursing perspectives in caring for ostomy patients and the families. In conclusion, the patient experience simulation was considered to be useful as it enabled them to share patient feelings and deepen their understanding of the needs of ostomy patients, and ultimately develop holistic care plans for ostomy patients.

The factors that students became aware of, consist of a core category of (a) ostomy conscious living. Nursing students experienced social withdrawal as they were affected physically and mentally by the simulated ostomy and (e) self-conscious of their appearance. Nursing students also developed awareness of (g) nursing perspectives in caring for ostomy patients and the families as a consequence of (f) imagining patient feelings through ostomy simulation.

The patient experience simulation provided nursing students with an understanding of the impact of ostomy from the patient's perspective. In conclusion, the patient experience simulation was considered to be useful as it enabled them to share patient feelings and deepen their understanding of the needs of ostomy patients, and ultimately develop holistic care plans for ostomy patients.

Keywords: nursing students, ostomy, awareness, patient experience, simulation

* Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University